

アクティブラーニングのステップアップとしての協働学習 —フォーラム・シアターの実践を通して—

豊田 哲也

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)

1. 協働学習の意義

大学における学士課程教育では、受動的な受講から能動的な学修（アクティブ・ラーニング：以下AL）への転換が強く求められている。平成26年中教審答申によると、ALは「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法」であり、「主体性をもって多様な人々と協力して学ぶこと」とされる。こうした学習活動で身についたチームワークのスキルは、将来の職業生活や市民生活に役立つと考えられる。

学習理論では、学習を「個人の営み」ではなく「社会的な営み」として捉え直す立場を社会的構成主義と呼ぶ。そこでは効率的な知識の伝達ではなく、対人的相互作用を通じた成長が重視される。共同学習cooperative learning や協働学習・協調学習collaborative learning はこのような考え方に立脚するものである。協働学習はグループ学習の一種であるが、参加者は社会的スキルを学び、互いを励ましながらかチームに貢献することが求められる。協働には、文化や社会的背景の異なる他者とコミュニケーションしながら、一つの目標に向けて協力して活動するという意味がある。

協働学習を機能させるためには、5つの基本的要素が必要であるとされる。(Johnson,et al)。

- ①肯定的な相互依存：個人の成功はグループの成功と結びついている。
- ②対面による相互交流：メンバーは学習資源を共有し積極的に助け合う。
- ③集団と個人の責任：メンバーはそれぞれ学習活動に責任があり評価を受ける。
- ④社会的スキルの発達：メンバーは対人関係の構築やチームワークを求められる。
- ⑤グループの改善の手続き：メンバーは各自の行為とその成果を明確に評価する。

2. 授業の概要

今回の報告は、2015年9月に京都大学総合人間学部および人間・環境学研究科で行った授業「地域空間論IV」「経済空間論」での実践例をもとに、協働学習の方法と効果について検討するものである。同授業は2011年9月にプロトタイプとして北海道大学文学部の集中講義でも実施している。授業テーマは「格差社会の地域分析」で、実証主義的な態度で格差現象を把握し、地理学、経済学、社会学、政治学など社会科学の視点から総合的に考察する能力を身につけることを到達目標とする。授業は連続する4日間の集中講義（90分×16コマ）として設定し、その全ての時間でAL（反転授業を含む）を用いた実験的な試みである。当初の受講者は学部生と修士課程の14名で、3日以上参加し単位を取得したのはうち8名（留学生3名）であった。4日間の概要を以下に示す。

第1日目：アイスブレイクを兼ねた自己紹介、格差論争の文献レジュメをジグソー法で作成し、シンク・ペア・シェア、ピア・レビューへ展開。

第2日目：地域格差と自治体消滅に関連する講演ビデオの視聴とノートテイク、グループ討論、それをもとに地域政策をテーマにディベート。

第3日目：格差と正義に関する講演ビデオの視聴と討論、チーム分かれて寸劇の創作・上演（フォーラムシアター）と相互評価。

第4日目：経済格差が生む社会の分断をトピックスにロールプレイ、今後の研究課題についてのコンサルテーション（ラウンドテーブル）。

社会的関心が高い格差問題をテーマとする4日連続の集中講義という好条件の中で、協働学習の様々な可能性を探ることを念頭に、設計段階からの活動のピークと位置づけたのが、3日目のフォーラムシアターである。

3. フォーラムシアターを進め方

フォーラムシアター（討論劇）は、もともとブラジルの演劇人アウグスト・ボワールが社会的問題を取り上げた「被抑圧者の演劇」を起源とし、観客と演じ手が討論を通じ解決策を見出す方法として広まったものである。これをALの教育的方略として見た場合、問題発見、意見交換、シナリオ創作、ロールプレイ、身体表現など多様で複雑なプロセスを含み、最も高度で複合的な協働学習の形態と考えることができる。今回は上記の協働学習の5つの基本的要素を考慮し、フォーラムシアターを1日のプログラムとして構成した。

第1セッション（60分）

- ①プログラムのガイダンス：協働学習の目的や意義を説明し、評価の方法や全体の進行予定を示す。
- ②4～5人でチームをつくる：学年、男女、国籍のバランスと多様性を考慮しチームを決定した。
- ③アイデアの予備的練習：イソップ寓話「アリとキリギリス」（英語版）を読み、物語の含意や発展のさせ方を例示する。

第2セッション（休憩を含め210分）

- ①取り上げるテーマとストーリーを考える：ブレンストーミングでアイデアを出し合う。
- ②寸劇のシナリオを考える：舞台設定、登場人物、セリフ、演出などを話し合う。
- ③役割分担を決めセリフの練習をする：練習の場所や時間配分など進め方はメンバーで相談する。

第3セッション（90分）

- ①寸劇の上演と討論（上演時間は5分）：各チームが順に上演。そのあと、提起された内容をめぐって観客が質問や意見を述べる。
- ②チーム評価を作成：各チームがテーマと内容の整合性、着眼アイデアの独創性、パフォーマンスの説得力の3項目で相互に評価を行う。
- ③個人活動の評価：：チーム内でのメンバーの貢献度をリーダーシップ、フォロアーシップ、アイデアの3項目で相互にコメント。
- ④優秀賞の発表と講評：チーム別の評価コメントは掲示し、優秀なチームを表彰。個人活動の評価はチーム内で回覧。教員が全体講評を行う。



写真 フォーラムシアターの上演（市役所の窓口で）

2チームが演じたシナリオは、授業中の学習や自己の体験に基づいて発想されたものであった。

チームa：高校時代仲良しだった3人が35歳になって偶然再会し、公園のベンチで境遇を語りあう（売れないミュージシャン、大手企業をリストラされた失業者、ベンチャー企業での成功者）。

チームb：市役所の相談窓口が舞台（写真）。生活保護を申請に来た失業者、財政の厳しさを理由に追い返そうとする職員、所得再分配に不満で税の不払いを主張する富裕者が登場し論争となる。

aは個人の才能や努力や運が結果として格差を生む理由を考える内容で、bは税や社会保障制度によって経済格差を是正する政策の正統性を論じるものであった。いずれも協働学習を通じて格差問題の深い学びにつながったと評価できる。

4. 教育的効果と今後の課題

当日記述させた受講者の感想によると、寸劇形式のグループワークは全員初めての体験で、非常に新鮮に受け止められたことがわかる。「前半に問題の所在を全員で考えたことが後半の議論の土台となった」「自らの演技を通して問題点を探るという活動はとても楽しかった」「チーム構成員が積極的かつ協力的に行動できたことに驚きと嬉しさを覚えた」「成果に関する忌憚ない評価から多くを得られた」など、大きな達成感や満足感がもたらされ、学習への意識も変化した。

今後は、毎週行われる通常の授業でフォーラムシアターの技法を導入できるか検討すること、協働学習のより効果的な進め方を目指し授業開発や実践研究を重ねていくことが課題となろう。